

# 第3回 全国U15バスケットボール選手権大会

## JBA推薦チームの導入について

- |                                   |                    |
|-----------------------------------|--------------------|
| <b>1. 育成世代の改革はなぜ行われているか</b>       | <b>… P 2 - 19</b>  |
| <b>2. 育成マインドの醸成</b>               |                    |
| <b>～なぜU15選手権にJBA推薦出場枠を設置するのか～</b> | <b>… P 20 - 31</b> |
| <b>3. JBA推薦チーム応募に必要な項目・基準・注意点</b> | <b>… P 32 - 44</b> |
| <b>4. JBA推薦チーム決定に至る方法論・スケジュール</b> | <b>… P 45 - 48</b> |

# 1. 育成世代の改革はなぜ行われているか

- 全国U15選手権大会はなぜ設置されたか
- 全国U15選手権大会にJBA推薦チーム出場枠をなぜ設置したか

## ■日本バスケットボールの強化育成を全体的に見直すことが必要だった

⇒ 育成の課題が存在していた

### 1. ポジショニング

- 選手のポジション（ガード・フォワード・センター）が早期に決められている。
- その理由は勝利に繋がりやすくなるためである。
- 選手は特定の役割の技術しか習得できない場合が見られる。
- 現代のバスケットボールはポジションが明確でなく、オールラウンドな役割が求められている

### 2. セレクション

- U15世代では早熟の選手たちに多くのプレータイムが与えられている現状がある。
- 身長価値が低く捉えており、身長は低い技術に優れる選手を選考しがち。
- サイズアップが日本の大きな課題として捉えられていた。

### 3. 大人（指導者・保護者）が勝利にこだわる考え方を強く持っている

- ゾーンディフェンス、ゾーンプレスの戦術を使えば、対応力の低い年代では勝利を得られる。しかし、選手の将来の土台となる基本技術、基本プレーは身につけにくい。
- 特定選手が多く出場（補欠の増加、オーバーユースによる障害、過度の期待によるバーンアウトなどの問題へ繋がる）
- 目の勝利が大切で、ビッグマンの育成を地道に行うことができない。

## ■ 育成世代における問題

- 系統的でない指導
- 過剰な競争
- 練習が少ない
- 大人と同じ競技スケジュール
- 大人と同じトレーニングプログラム
- 大人と同じ練習量
- 男子と女子の年代におけるトレーニング内容が同じ（発達には女子が早い）
- 過程（取り組み方）より結果（勝敗）に焦点がある
- 精神的に未熟な選手への過度の要求
- 保護者のクレーム、結果が大切という価値観



解決施策の検討・実行

## ■育成方針（育成世代で重要視すべき考え方）

- 年代毎(習熟別) に練習内容を変える（技術・戦術練習の割合、量・質）
- ゲームを多く経験すること→トーナメントではなくリーグ戦文化
- バスケットボールを楽しませて将来に繋げる
- トライ&エラーをさせる
- 技術を学ぶ年代＝認知判断を伴う技術練習を多く、戦術練習の割合
- 能力別（飛び級）の環境＝育成センターU12/U14/U16
- 世界を目指した指導＝誰もがオールラウンドプレイヤーを目指す
- 年代別指導（ラーニングエイジ）＝習熟度別に、易→難
- 勝利至上でない＝勝利のとらえ方＝結果だけではなく過程に焦点を当てる
- 障害を引き起こさない、バーンアウトさせない
- LTAD（長期選手育成理論）を考慮
- 人間教育、人格形成＝人間力向上なくして競技力向上なし
- 保護者教育＝家庭でも選手がポジティブに成長（栄養・精神的サポート）
- スポーツ医科学の利用

育成世代の選手にこれらを経験させていく環境づくり



実行していけば

将来は質の違ったプレイヤーが育成される

## LTADモデル

FUN

Train to Train

Learn to Win

Learn to Train

Train to Compete

Train to Win

## PHVモデル

発育期フェーズ2

発育期フェーズ4

発育期フェーズ1

発育期フェーズ3

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

## 代表活動/トップ育成活動

A代表 B代表・3×3代表

U16/U17/U18/U19代表・U18 3×3代表

U20/U22代表・3×3代表

U13/U14/U15NationalDC

U12ブロックDC

ジュニアユースアカデミー（長身者育成）

## 大会

全国ミニ大会

全国U15選手権大会

ウインターカップ

インカレ

全中大会

インターハイ

BLG U15 CS

U16国体

## 日常活動

ユースU15

ユースU18

Bリーグ特別指定

Bリーグ

都道府県/地区育成センター

アーリーエントリー

アーリーエントリー

Wリーグ

11歳

12歳

13歳

14歳

15歳

16歳

U12

U15

U18

U22

リーグ戦制度（都道府県・地区）

小学校部活  
クラブ

中学部活  
クラブ  
ユースU15

高校部活  
クラブ  
ユースU18

大学チーム  
Bリーグ/Wリーグ

## ■育成世代の目標とする環境整備のコンセプト

- 試合数確保 → 登録者に試合環境を。負けても試合がある仕組み：リーグ戦
- 能力別 → リーグ戦階層化による拮抗したゲームとなりうる環境整備  
→ 育成センターで素質・能力ある選手の成長スピード上げる
- 各年代でチームが動く → 各年代で主役となる

## ■U12 : 楽しさの追求

- ・子どもたちにバスケットボールを触れさせる。
- ・楽しさを伝え、バスケットボールを好きになってもらう。
- ・基礎基本を伝え、上手になる方法論を伝える。

## ■U15 : 個の育成

- ・個人技術/個人戦術を系統的に学び将来の土台を築く。
- ・徐々にバスケットボールの専門化を進めていく。
- ・少しずつ強化層と普及層が分かれ始める。

## ■U18 : 強化層（世界基準を日常に）・普及層（楽しめる環境構築）の両面

- ・バスケットボールの戦術も緻密となり、より高度な専門化。プロへの前段階。
- ・普及層（楽しむ）と強化層（高い競技性）は明確に分かれていく。

## ■U22 : 強化層の育成（世界基準を日常に）

- ・長身者のトップレベルへの適応

## ■ 5つの育成改革施策

1. 育成センター
2. リーグ戦制度
3. 大会整備
4. 指導者教育
5. マンツーマン推進（※2015年度より先行実施）

## ■強化・育成的視点と普及的視点とは？

- ・ 育成年代である22歳以下は強化、育成、普及の視点で考える必要がある。
- ・ 年代が進む（U12→U22）につれて重点要素は変化する。
  - ① 育成から強化が強まっていく : 結果を求められる年代に近づいていく
  - ② 強化層と普及層が分離していく : 専門性を求める層と楽しむ層に分かれていく

## ■環境整備を都道府県に重点を置く

- ・ 日常に関わる 強化「世界基準」 育成「将来を見据えて」  
普及「全ての競技者に試合環境を」
- ・ 日常的に育成課題を解決する取り組み  
試合環境整備 → 練習環境に影響、育成コーチング、インテグリティ

## ■環境変化に対応 <現状起こっている環境変化とは？>

- ・ 学校における働き方改革、運動部活動ガイドラインによる活動時間・休養日設定
- ・ 育成センターの設置
- ・ リーグ戦化の推進
- ・ 登録移籍ルールの変更 など

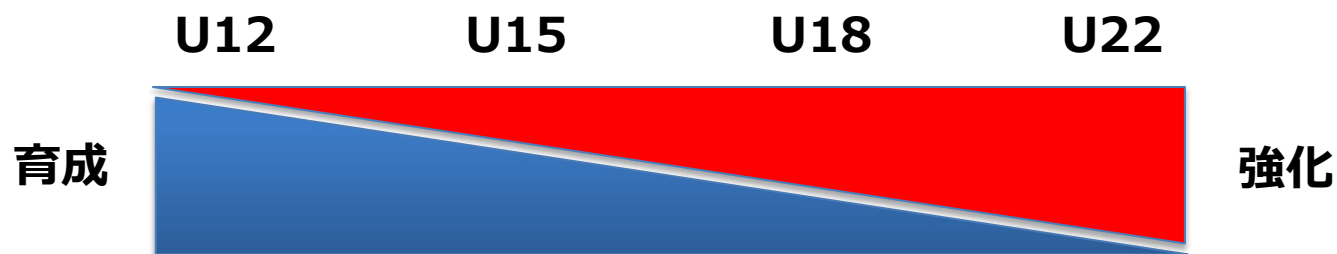
## ■カテゴリー毎に競技環境整備を考えている

- ・ カテゴリーに存在する育成課題を解決するために取り組む。
- ・ 強化、育成、普及の視点でよりよい形を目指し、将来のバスケットボール界が元気になるようにしたい。
- ・ 競技環境整備の方策は「育成センター」「リーグ戦」「大会整備」「指導者教育」である。

**JBA理念：バスケットボールで日本を元気にする**

**スローガン：Break the Border**

## JBA育成理念と強化育成のバランス



## 具現化施策

### 育成センター

発掘  
育成  
指導者教育

### リーグ戦

地区リーグ  
県リーグ  
ブロック・トップ

### 大会整備

都道府県予選  
ブロック大会  
全国大会

### 指導者教育

インテグリティ  
育成コーチング  
指導内容

## 1. 競技環境を一気通貫で考えられなかったこれまで

- 1) 各世代・各連盟で検討したため一気通貫で考えられなかった。
- 2) 各世代の強化・育成理念が反映された競技環境ではなかった。
- 3) 日本の社会環境を考慮しつつ各世代でやるべき課題が連携された競技環境を構築する必要性

## 2. 育成の考えに沿った競技会・日常環境整備の必要性

- 1) 育成センター : 能力ある選手の成長機会の創出（発掘・育成）
- 2) リーグ戦 : ゲームをする機会、拮抗したゲーム環境を競技者に準備
- 3) 競技会における育成基準構築 : 勝利至上に陥ることなく、将来を見据えたコーチングが行いやすくなる競技会の在り方
- 4) 競技形式 : マンツーマン、人数、リング、ボール、時間、ルール

## 3. 指導者の在り方

- 1) インテグリティ : 暴力・暴言の根絶：啓発活動(予防)、罰則整備(対応)
- 2) 指導内容 : 将来を見据えた技術戦術指導内容の理解
- 3) 育成コーチング : 発育状況を考慮したトレーニング量、質の調整

## 4. ガイドラインの整備

- 1) 日常で障害・バーンアウトを発生させない練習量・質のコントロール
- 2) 年間・月間試合数
- 3) 週・1回の練習時間

## ■重点項目

### 1. インテグリティ

→ バスケット界における暴言暴力の根絶

### 2. 日本人選手に不足していると指摘されているもの

→ 対応力

→ リーダーシップ

### 3. 育成マインド

→ 未来の可能性を持った選手達をより大きな飛躍をさせるためにどうすべきかを考えていく

→ 選手に主体性・リーダーシップを持たせるコーチングを考える

## ■ 個の育成：技術戦術の基礎を土台として学ぶ

- 将来どのコーチにであっても共通する基本技術・基本プレー・対応力を土台として構築する時期

## ■ まだ見極めがつきづらい年代

- 早熟・晩熟が混在。だからこそ将来の可能性を信じて将来を見据えて育てる方法が必要

## ■ 体も心もまだ大人と同じではない

- 体も心も大きく成長する
- まだ大人のような許容量は持っていない

## ■ 発育（早熟と晩熟）

- PHV（Peak Height Velocity：身長が大きく伸びる時期）
- 個人差が大きく4～6年幅
- 男女差も2年程度。女子が早い

## ■ 精神的な変化

- 思春期によるホルモンバランス変化が不安定にさせる
- 自己制御能力は大人と異なるといわれている

## ■ 何をトレーニングすべき年代か

- 成熟度によりトレーニングすべき内容は変化していく

## 1回の練習での時間配分 (%)

		U7/U8	U9/U10	U11/U12	U13/U14	U15/U16	U17/U18	U19/U20
1	運動能力	30						
2	マイナーゲーム	30						
3	ボールを使った簡単な動作	20	20					
4	複数のスポーツ活動		25					
5	技術トレーニング		20	25				
6	3対3		20		20			
7	運動能力/コーディネーション/コンディション			25	20	25	20	20
8	個人戦術			15	15	15		
9	ポジション別技術練習				25	25	25	20
10	チームファンダメンタル			15		20	30	25
11	パワートレーニング						10	15
12	バスケットボールゲーム	20	15	20	20	15	15	20

## トレーニング量と内容

		U7/U8	U9/U10	U11/U12	U13/U14	U15/U16	U17/U18	U19/U20
1	練習回数（回/週）	2	3	4	5	6	7	9
2	アスレティックトレーニング回数（週）				1	1-2	2-3	2-3
3	シーズンゲーム数（回）		15-30	20-40	25-45	25-50	25-55	30-60
4	運動能力トレーニング	■	■	■				
5	技術・ミニゲーム	■	■	■				
6	ゲームで使うファンダメンタル	■	■	■	■			
7	バスケットボール基礎技術			■	■			
8	アスレティックトレーニング				■	■		
9	専門的トレーニング				■	■		
10	トップレベル連結トレーニング						■	■

# 年代毎にトレーニングすべき内容は異なる

## タレント育成におけるトレーナビリティ・モデルのまとめ

負 荷 ト レ ー ニ ン グ	幼児	児童後期	思春期	成人期		
	年代順					
	6-9歳	10-13歳	14-18歳	18歳以上		
	生物学的年齢					
	Tanner Stage I	Tanner Stage I - II	Tanner Stage III - IV	Tanner Stage V		
	成熟度					
	発育前	発育中	発育後			
	不可トレーニング技術の要素					
	・コーディネーショントレーニング ・アジリティトレーニング ・バランストレーニング ・エクササイズテクニックに焦点を当てた軽い抵抗トレーニング	・バランストレーニング ・プライオメトリクス（ジャンプと着地のメカニズム） ・体幹トレーニング ・エクササイズテクニックに焦点を当てた軽い抵抗トレーニングとフリーウエイトトレーニング	・バランストレーニング ・プライオメトリクス（中強度） ・体幹トレーニング ・低-中負荷フリーウエイトトレーニング ・ヘビー、伸張性でスポーツ専門別抵抗トレーニング	・バランストレーニング ・プライオメトリクス（高強度） ・体幹トレーニング ・中-高負荷フリーウエイトトレーニング ・ヘビー、伸張性でスポーツ専門別抵抗トレーニング		
	トレーニングによる適応					
	神経系の適応		ホルモン／神経系／筋肉／腱の適応			
プ ラ イ オ	長期競技者育成ステージ					
	楽しさ	トレーニングを学ぶ	トレーニング1	トレーニング2	競争のためのトレーニング	勝利のためのトレーニング
	ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4	ステージ5	ステージ6
	基礎的な動きの技術	低強度プライオメトリクス	中強度プライオメトリクス1	中強度プライオメトリクス2	高強度プライオメトリクス1	高強度プライオメトリクス2
	・最小の伸張性負荷 ・非系統的な遊び	・低伸張性負荷 ・低い構築度	・中伸張性負荷 ・中程度の構築	・中-高伸張性負荷 ・中-高構築	・中-高伸張性負荷 ・高構築	・高伸張性負荷 ・高構築スポーツ専門別
ウ エ ィ ト	ステージ1	ステージ2	ステージ3		ステージ4	
	基礎的なウエイトリフティングスキル	ウエイトリフティングを学ぶ	ウエイトリフティングトレーニング		ウエイトリフティングトレーニングのパフォーマンス	
	・フィジカル要素に焦点 ・低い構築(あまり計画性なし)	・技術要素に焦点 ・低-中構築	・第1に技術面の強化に焦点 ・第2にパフォーマンス結果に焦点 ・中構築		・パフォーマンス結果に焦点 ・第2に技術面強化に焦点 ・高い構築度(細かく計画する)	

(Pichardo et al 2018)

## ■ジュニアオールスターからU15選手権へ

- ・JBAは32回続いたジュニアオールスターを全国U15選手権大会へと発展的に移行させた

## ■U15選手権はなぜ設置されたか？

- 中学3年生の引退時期を延長する
  - 中3夏から高1入学までの空白時期の長さが強化育成的にマイナスになっていた。
- バスケットボールをやりたい選手が存在する
  - 勉強との両立を図る選手、バスケットボールに打ち込む選手の競技環境を設立
  - 自らが選択して引退時期を延長する選手のための大会とした
  - 教育的観点から勉強に打ち込むべき時期との指摘もあるが、参加するかは個人の選択。
- クラブチーム、BユースU15の設立
  - 部活動チーム以外でのバスケットボール活動の場を拡げた
  - U15選手権は部活、クラブ、BユースU15が出場可能な大会
- 部活動チームでも参加可能
  - 中2以下の新人チームで都道府県予選参加は可能、勝ち抜いての本大会参加可能。
  - 中高一貫校など中3が部活動チームで継続している場合、参加可能。

## ■U15選手権はなぜ1月か？

- 引退時期を延長させるための大会は、学校休業中の必要。12～1月の冬季休業中。
- 12月にウィンターカップがあり、1月に設置。同時期開催は運営上困難。
- 原則として1月授業再開までに大会を終了させる。

## 2018年度（2019年3月開催） ジュニアオールスター2019の 大会プログラムに掲載

## U15世代は バスケットボール環境が **変わります！**

育成世代は大きく成長できる時期だからこそ、都道府県で新たな取り組みが始まります。

私たちJBAは育成世代の課題を解決すべく「発掘」「育成」「指導者教育」「大会」「普及」の5つの視点から  
U15世代のバスケットボール環境の改編を進めています。



### U15世代のバスケットボール環境の改編

これまで		これから
U13ブロック・U14トップ・Jrオールスター・U15トップ	→	都道府県DC・トライアウト・U13/U14/U15ナショナルDC リーグ戦化・U15選手権
<b>■ジュニアオールスター</b> 中学1・2年生の都道府県、地区選抜チームによる大会。 <b>■U13ブロックエンデバー・U14/U15トップエンデバー</b>	発掘	<b>■都道府県育成センターの設置</b> <b>■U15選手権大会、BリーグU15大会</b> 中学3年生（15歳以下）の選手が対象で、部活動・クラブ・B リーグU15チーム参加の大会。 中学3年生の活動時期の延長、有望選手の活躍の場
<b>■U13ブロック・U14/U15トップエンデバー</b> 年1回の事業。都道府県のエンデバーは伝達が主で継続的、 計画的な育成事業は都道府県単位では行っていない。	育成	<b>■都道府県育成センターの設置</b> 「個の育成」「選手作り」を目標に、年代/習熟度を考慮した指 導内容を実施する。 将来性・オールラウンダー育成・特化した能力醸成を目指し 将来大きく結果を出せるように指導する。
<b>■クラブチームはほとんどなし</b> ほとんどの都道府県でクラブチームがなく、全国中学校バス ケットボール大会予選終了後は活動場所がなかった。		<b>■U15選手権大会の設置</b> 部活動・クラブ・BリーグU15チーム参加の全国大会の設置。
<b>■ジュニアオールスターの活動</b> 勝利を目指すための「チーム作り」が主となることが多か った。	指導者 教育	<b>■都道府県育成センターの設置</b> ジャパンズウェイを考慮しながらの指導内容の実践。地区育 成センターの設置により、関わる指導者数が増える。U16 までに学んで欲しい内容を実践を伴いながら理解してもらう。
<b>■エンデバーによる伝達</b> 内容は年代別指導内容の伝達で年1回4時間程度の開催。 <b>■ジュニアオールスター</b> 関わったスタッフの指導者経験値を高めていた。	大会	<b>■U15選手権大会</b> 中学3年生（15歳以下）の選手が対象で、部活動・クラブ・B リーグU15チーム参加の大会。 2019年度予選大会（2020年3月） 2020年度第1回大会（2020年12月）
<b>■全国中学校バスケットボール大会</b> 都道府県～ブロック大会を勝ち上がった中学校の部活動にお ける大会。 <b>■BリーグU15大会（2016年度）（男子のみ）</b> チャンピオンシップ、チャレンジカップ、フレンドリーカップ		<b>■全国中学校バスケットボール大会</b> 都道府県～ブロック大会を勝ち上がった中学校の部活動にお ける大会。 <b>■BリーグU15大会（男子のみ）</b> チャンピオンシップ、チャレンジカップ
<b>■ジュニアオールスター</b> 憧れ、目標とする選手も多数いる。 地区からの練習会に参加するためにJBA登録をしている。	普及	<b>■都道府県育成センターの設置</b> 県選抜・地区選抜のステータスの保持。 「選手作り」を進めることでバスケットボールが上手になる案 じ、指導者にも教える楽しさを感じてもらおう。
		<b>■リーグ戦化</b> リーグ戦化で登録したチームに公式戦試合数の保障、複数 チーム登録可能による出場機会の増加。 中学3年生の活動時期の延長。 部活動・クラブチーム・BリーグU15チームが参加できる大会 により裾野の拡大を図る。



### 育成世代のリーグ戦化について

■育成世代のリーグ戦は普及・強化・育成を実現します。

現在、日本のバスケットボール界はトーナメント文化が根付いており、試合を経験で  
 きるチームに限られていて、試合を経験できる選手に限られているのが現状です。  
 しかし、総当たりとなるリーグ戦では、あらかじめ予定されたゲームスケジュールに  
 沿って試合をします。

対戦グループはレベル別に区分けされるため、拮抗した試合の数が増加します。  
 リーグ戦化は、レクリエーションとして試合を楽しみたいチームと高いレベルでバス  
 ケットボールを追求したいチームの双方の環境を整えることで、バスケットボール全体  
 の普及・育成・強化につながります。

JBAでは育成世代の選手がより多くの試合を経験し成長できる環境を、リーグ戦化を通じて進めていきます。

目指す  
育成環境



## ■ U15世代活性化のために

- 中3引退時期の延長、部活・クラブ・BユースU15の競い合いにより競技力の高いゲームが行われることを期待。
- 競技環境の変化により選手の成長スピードが高まることを期待。

## ■ 勝利至上が強まりすぎることは懸念

- 全国大会出場、上位進出を目指すことが余りに優先され、移籍による選手獲得、過度なトレーニングにより勝利のみが追求されることは本意ではない。
- 育成世代の大会であることを大前提に、競技力を競い合ってもらえる様に指導者に「育成マインド」を広めたい。

## ■ U15選手権の出場枠にJBA推薦チーム出場枠5チームを設定

- 以上の考えから推薦チーム出場枠を設定した。

## 2. 育成マインドの醸成

－ なぜJBA推薦枠を設置するのか

## ■ 目的

- 日本の現状環境で目指すべき育成チームの在り方を示す
- 育成年代を指導する指導者が、勝敗のみにこだわる考え方をバスケットボール先進国のような育成(過程)を重視する考え方に変えていくために、JBAからのメッセージとする

⇒ 育成重視でチーム作りをしている育成年代のチームを評価する

過去 = 「現在（U15世代）の競技実績」の一面だけが評価される文化

今後 = 「将来を見据えた育成・環境整備」と「現在の競技実績」の両面が評価される文化



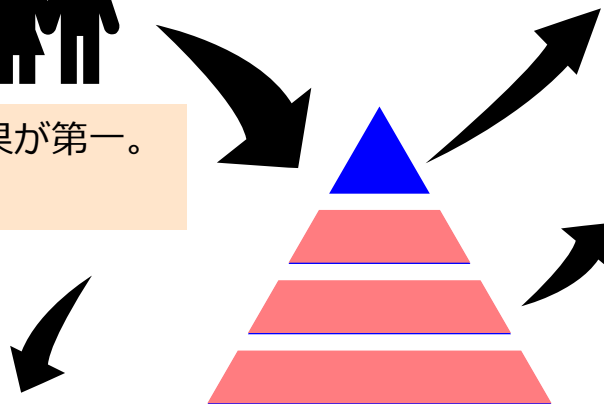
育成世代を預かる指導者のビジョンの違いがもたらす未来

「自分のチームが、今、勝つことが最優先の指導」

を受けた育成世代



今の自分の結果が第一。  
燃えに燃える。



「若き今」に情熱を注ぎすぎて、  
一部は、燃え尽き症候群に、、、  
(バーンアウト)  
、、、未来はこれからなのに。



選手として勝つ喜びを十分味わった競技者

- ・ 勝った！嬉しい。また勝ちたい。次の目標へ。

選手として勝つ喜びを十分味わえなかった競技者

- ・ 負けた。悔しい。次のカテゴリーで頑張ろう。
- ・ チームは勝った。でも私は補欠。上では無理。
- ・ 目標達成できなかった。上には上がいる。
- ・ 競技者引退と同時に、多くは目標を失い、バスケットボールから遠ざかる現状。。。



指導者のビジョンの通り、多くの選手が「勝てたかどうか」、  
それが心に残り、今を評価し、終了。

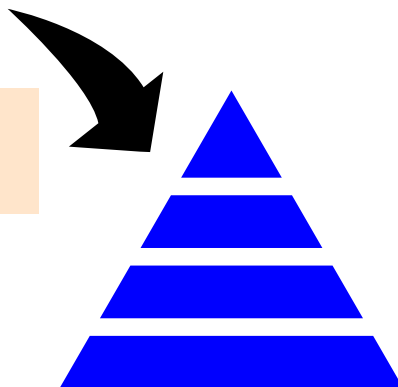


育成世代を預かる指導者のビジョンの違いがもたらす未来

「日本バスケの向上を目指して、**選手の将来を見据え** 世界と戦うための指導を受けた育成世代



未来の自分の姿に期待。  
勉強を積む。



- ・ バスケットで日本を元気にするために  
「私は、これから」スポーツとは異なる業種から、  
世界と戦う日本のバスケット仲間を支え、  
盛り上げていきたい！



勝っても負けても、目標は将来にある

- ・ バスケットで日本を元気にするために  
「私は、これから」プレイヤーとして  
活躍したい。もっと自分を磨こう！



- ・ バスケットで日本を元気にするために  
「私は、これから」コーチとして活躍したい。  
世界と戦う力を育成するための  
より良いコーチングとは何だろうか？



- ・ バスケットで日本を元気にするために  
「私は、これから」サポーターとして  
世界と戦う元ライバルを応援する！



指導者のビジョンの通り、多くの選手が、  
「バスケットで日本を元気にするために、これからの自分ができることは何か」を考え続ける。

### ■なぜ出場チーム決定に推薦制を採用しようとしているか

- 高校ではインターハイの優勝・準優勝チームに枠があるが、全国U15選手権大会で全中大会枠を採用しないのは「競技力の担保が難しい」ため。引退、中学3年生の部活動禁止を掲げているところも多いため。
- 全国U15選手権大会が設置され、都道府県予選を勝ち上がる仕組みにしている以上、勝利を目指す働きを強めている。
- 優秀な選手を集めて勝利を得ようとするチームが出現しているが、これを排除することは難しい。
- U15世代はU18と異なり、まだ完全に強化と分離はしておらず、成長過程段階である。
- 育成年代には「育成を重視するチーム」も評価されるべきとの考えがある。
- 育成を重視する考え方が競技力を高めようとするチームに影響するようにしたいと考えた。

## ■育成を重視する考え方とは何か

**「その世代でやるべきことをやりつつ、勝利を目指すこと」**

### ● やるべきこととは…例えば

- 指導者は、インテグリティを念頭に置き、暴力暴言のない指導をすること
- 指導者は、選手に障害を持たせず、バーンアウト(燃え尽き症候群)をさせないこと
- 選手は、全力を尽くす姿勢を身につけること
- 選手は、基本技術・基本プレー・自己解決力を学ぶこと

### ● バスケットボール先進国では、このような考え方が採用されている

- U18でどのような選手を作るべきかという考え方
- 若い世代での勝利(優勝)は重視していない
- クラブチームでU10～U18～トップチームまでの一貫した育成方法

### ● 日本でなぜできていないか？

- バスケットボールは部活動で行われてきた
- 6/3/3/4年の区分けで、それぞれの世代で勝ちたい気持ちが募りやすい
- 進学と同時に指導者が代わり、指導内容の一貫性が保ちにくい

### ● 日本のバスケットボールの育成環境を改善する必要がある

- ルールによる浸透：大会でのルールは大きな影響がある
- 指導者教育：指導者がこの世代で重視しなければならないことへの理解を深める

## ■ 日本の育成環境の改善のために

### ① 指導者教育

- 育成センターにおける習熟度別(年代別)指導方針、指導内容の提示
- 中学校における部活動バスケットボール指導手引きの作成
- インテグリティ啓発、暴力暴言の根絶、オンコート・オフコート

### ② 大会でのルール

- ライセンス取得を進める影響力と同様に、育成世代の指導者の考え方に影響を与える
- 全国U15選手権大会のJBA推薦枠の推薦基準として、競技力を高めようとする指導者へメッセージを出す

## ■ 育成評価基準を示すことによる効果

- 「育成で評価されるようなチームを目指したい」というチームが増えること
- 世界の育成年代のチームが行っている育成の水準を示し、ロールモデルを示すこと
  - 日本の指導者がその形を目指して育成環境を作っていこうと努力する  
新しい努力の方向性をJBAが示すこと
  - 推薦基準に「育成評価基準」を使うことが「影響力」をもたらす

## ■ 育成評価基準に求められているもの

- 「世界水準の育成基準」を示すという影響力としての機能
  - 世界レベルの最高の育成環境を「加点方式」で示す
  - 多くのチームが実現は難しいので足切りにはしない
  - 目指してもらいたい未来だから示す = 影響力としての機能
- 全国U15選手権大会の推薦チームを選ぶ基準としての機能
  - 育成を志すチームとしての最低ラインを「必須基準」として示し、満たしていないのであれば、推薦チームとしては出場できないようにする
  - 易し過ぎると推薦基準チームが多くなり、選ぶのが難しくなる
  - 理想が高すぎると目指そうというチームが少なくなる  
= よって中学校(部活)、クラブ、Bユース別

- **必須基準**・・・クリアすることで育成チームとして審査の対象となる  
→ 評価基準へ進む

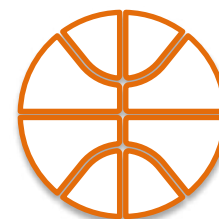


B.LEAGUE

Bユース

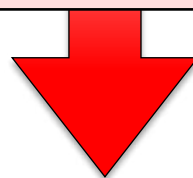


中学(部活)

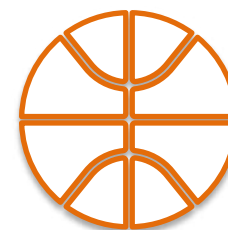


町クラブ

- **評価基準**・・・育成チームの理想像にどれだけ近づいているかで評価する  
→ 推薦チームの選定・最終基準へ



チームとしての 基準	指導者としての 基準	育成環境としての 基準
理念	コーチ ライセンス	選手人数
活動実績		コーチ人数
組織整備	研修受講	リーグ戦参加
移籍人数	懲罰の有無	プレータイム



チームとしての 理想像		指導者としての 理想像	育成環境としての 理想像	
競技力	活動実績	コーチ ライセンス	トレーナー の配置	練習時間 施設の充実
法人格整備	海外交流	マンツーマン ゲームモデル	育成カリキュラム の整備	年代毎の リーグ参加
※青字:将来的に検討		育成ディレクター の配置		



## ■必須基準の項目

- チームとしての基準 : 理念 活動実績期間 組織整備 移籍人数
- 指導者としての基準 : コーチライセンス 研修受講 懲罰の有無
- 育成環境としての基準 : 選手人数 コーチ人数 リーグ戦参加 プレータイム

## ■評価基準の項目

- チームとしての理想 : 競技力 海外交流 法人格整備 活動実績
- 指導者としての理想 : コーチライセンス マンツーマン 育成ディレクター配置
- 育成環境としての理想 : トレーナー配置 練習時間・施設 育成カリキュラム整備  
年代別リーグ参加

## ■最終基準の項目

- 競技基準
- 試合動画確認

### 3. 推薦に必要な項目・基準・注意点

- 必須基準
- 評価基準
- 最終基準
- 追加基準の可能性

- 推薦はJBA登録チームに対して1枠とすること
- 育成に関する理念(チームフィロソフィ)があること
- 所属スタッフは過去5年間に裁定・規律等、懲罰対象となっていないこと
- マンツーマンディフェンスを採用しているチームであること
- 年代別育成カリキュラムを作成し、これに基づいて実施していること
- チームとして2年以上の活動実績およびJBAへのチーム登録・競技者登録の実績があること
- 推薦基準の「コーチ1人あたりの選手人数」「移籍人数」は、チーム区分毎に指定された数を超えないこと
- 都道府県リーグ戦事業に参加していること
- トレーナーが試合に必ず帯同していること
- チームとして緊急時対応マニュアルを準備し、その内容を関係者全員に周知していること

**必須基準** : 推薦のために必須、満たしていない場合は対象外  
**評価基準** : 項目別に点数化  
**最終基準** : 選考が拮抗した場合の最終判断要素

- ① 育成に関する理念（チームフィロソフィ）：文書化され、チーム内で共有されていること
- ② 活動実績期間：2020年度以前からJBA登録されていること
- ③ 1週間における活動時間：12時間以内とし、過度の活動となっていないこと
- ④ 組織の整備：練習会場の施設、ミーティングルームの設置、緊急対応マニュアルの整備等
- ⑤ コーチライセンス：HC、ACは定められたコーチライセンスを保有していること
- ⑥ 研修受講：HC、ACは指導者養成講習またはリフレッシュ講習を受講していること
- ⑦ 裁定・規律等、懲罰対象の有無：懲罰対象ではないこと
- ⑧ コーチ（HC、AC）1人当たりの選手人数：15名以内であること
- ⑨ 移籍人数：移籍転入者の割合が20%以内であること
- ⑩ 都道府県リーグ戦事業への参加：参加していること

## 1. 育成に関する理念（チームフィロソフィ）

- ・13～15歳は、育成と強化のバランスを取りながら、心技体における成長の土台を構築する時期です。
- ・勝利に偏りすぎず、放任になりすぎない、あらゆることの大元になる理念を定義し、チームを運営していただくことをお願いしたために第一に設けました。

## 2. 活動実績期間

- ・推薦したいチームとは「移籍により強くするチーム」ではなく、「育成活動を継続的に実施」しているチームです。
- ・チーム登録の有無によりチーム活動が何年間行われているかを確認します。

## 3. 1週間における活動時間

- ・運動部活動ガイドラインにも示されている通り、短時間で効率的な指導により質・強度、密度の高い練習を心がけていただくために活動時間の上限を設けました。
  - ・2.5時間×5日＝12.5時間であり、2時間から2時間半・週5日程度の練習機会でレベルアップを図っていただきたい年代であることを強調するために12時間としました。
- ※活動時間には、チームウォーミングアップとクーリングダウンを含みますが、個人練習や個人トレーニングは含まないこととします。

## 4. 組織の整備

- ・緊急対応マニュアルおよびAEDについては、安全に関する項目です。安全面への配慮はスポーツ活動を行う上で大切であることを意識していただくために設けました。
- ・緊急対応マニュアルはJBAで発表しているものを参考にチーム用にアレンジしていただき、チーム内で共有をしてください。
- ・AEDは施設に設置されていれば「常設」とし、チームで保持していれば「保有」とします。

## 5. コーチライセンス

- ・指導者がどのように指導するかは選手の成長に大きな影響があり、育成チームの構築には指導者の考え方が重要です。
- ・指導者のライセンス取得が指導者研修機会の一つの指標となるため、必須項目で設けています。
- ・BユースではU15の必須ライセンスとしてB級であるためこれを採用します。
- ・部活動とクラブでは、都道府県レベルでの講習を受講していただくことで取得できるC級を最低基準としています。

## 6. 研修受講

- ・「指導者は学び続ける」ことを実践していただきたく、対象となる研修会(指導者養成講習会またはリフレッシュ講習会)のいずれかを受講することを必須とします。
- ・コーチ(HC、AC)として申請する方の全てが対象となります。

## 7. 裁定・規律等、懲罰対象の有無

- ・暴力暴言、ハラスメントのない指導を徹底していくために、過去5年以内に懲罰対象がないことを必須とします。
- ・都道府県協会やJBAに報告されている事項について判断します。それ以外の事案についても重要と判断した場合は検討する場合があります。

## 8. コーチ一人当たりの人数

- ・良質な指導環境構築のために、選手を見てあげられる指導者数を規定しました。
- ・部活動は学校現場であるため、補充が容易ではないことを考慮し、15名以内としました。
- ・部活動において30名の部員がいる場合は2名の指導者が必要、40名の場合は3名です。
- ・Bユースでは15名で2名のコーチが必須であり、クラブにも採用し、8名以内としました。
- ・チーム保有人数との連携があります。

### 9. 移籍人数

- ・大会エントリー時に移籍者(当該年度内に他チームから当該チームへ登録を変更した選手)を提示していただくことでチェックします。
- ・部活動はエントリー15名の1/5以内=3名まで、クラブは12名の1/5以内=2名まで、BユースはBLG規程に則ります。

### 10. 都道府県リーグ戦事業への参加

- ・都道府県リーグとは県リーグだけでなく地区リーグも含めます。都道府県の実情により県リーグが開催されていない場合は、地区リーグへの参加も都道府県リーグ戦事業への参加と見なします。

- ① トレーナー・ストレングスコーチの配置/練習参加/トレーニングカリキュラム作成等
- ② 練習プログラムの整備状況
- ③ 施設環境の整備状況・コートの使用状況
- ④ 年代別育成カリキュラムの整備状況

## ■ トレーナーに関する補足説明

- ・ トレーナーとは医療的な対応をする役割を持つ方を指します。
- ・ トレーナーの試合帯同、練習参加の割合・回数などを得点化します。

### 【トレーナー資格の例】

- ・ NATA（全米アスレティックトレーナーズ協会）
- ・ 日本スポーツ協会アスレティックトレーナー
- ・ 理学療法士、作業療法士
- ・ 柔道整復師、はり師・きゅう師、あんまマッサージ指圧師

## ■ ストレングスコーチに関する補足説明

- ・ ストレングスコーチとは体力トレーニングを担当する方を指します。
- ・ ストレングスコーチの配置、トレーニング実施、資格の保有などを得点化します。
- ・ カリキュラムのみの提供、練習での指導、成果管理の関わり度合いで点数が変わります。
- ・ いずれも活動報告書に記載していただきます。

### 【ストレングスコーチ資格の例】

- ・ JATI認定資格 JATI-ATI
- ・ NSCAジャパン認定資格 CSCS、NSCA-CPT
- ・ NASM-PES

### ■練習プログラムにおける補足説明

- ・練習プログラムの整備、選手研修、保護者研修の実施などを得点化します。
- ・報告書を添付していただき、その内容をチェックさせていただきます。

### ■施設環境整備における補足説明

- ・コート確保については、フルコートかそうでないか(ハーフコートや外など)が基準です。  
→ 2時間以上で1回とカウントします。
- ・ミーティングルームやトレーニングルームの有無は写真を添付していただいて確認します。
- ・トレーニングルームは優先利用または所有について得点化します。  
体育館に常設されているなどを写真等で説明いただきます。
- ・アイシングができる方法の整備、空調（冷房・暖房）の有無を得点化します。

### ■年代別育成カリキュラムにおける補足説明

- ・ U13、U14、U15、U16(中高一貫校やクラブチーム、Bユース)があることなどです。U12を含むことも可能です。
- ・ 各カテゴリー毎にチームがあり、育成カリキュラムが作られており、なおかつ各年代が都道府県や地区リーグ戦に参加している場合に加点されます。
- ・ 育成カリキュラムの内容により加点する場合があります。

### ■ 試合の動画確認

- ① **JBAが指定する直近の大会の動画を提出**  
→ 試合映像を撮影しておいてください。
- ② **マンツーマンディフェンスが採用されているかの確認**  
→ 審査委員会にて動画を見て判定します。
- ③ **選手の試合出場状況の確認**  
→ 動画とスコアシート等で確認します。

## ■ 試合動画提出における補足説明

- ・ 最終基準に持ち込まれた場合、試合の動画を提出していただきます。  
これはJBAより指定する試合の提出を求めるため、チームの責任で動画撮影を行っておいてください。
- ・ 試合動画では、マンツーマンディフェンスが採用されているか、選手一人一人のプレータイムがどのように確保されているか、プレーの質はどの程度かを観点として確認をします。

## 4. 推薦決定に至る方法論・スケジュール

- どのようにして審査を行うか
- 推薦枠の割り振りの考え方

## ■審査機関

JBA推薦枠審査委員会にて審査し、全国U15選手権実施委員会にて決定する。

- 一次審査で必須基準のチェックを行い、基準を満たしたチームが二次審査に進む。
- 二次審査で評価基準や最終基準のチェックを行う。
- 二次審査の結果に基づき、実施委員会にて推薦チームを決定する。

## ■スケジュール（予定）

期日	内容
2022年8月1日（月）～31日（水）	応募用紙受付
2022年9月9日（金）～9月23日（金）	応募フォーム入力
2022年10月3日（月）	一次審査結果公表
2022年11月24日（木）	推薦チーム発表
2022年11月30日（水）	大会エントリー締切

## ■該当チームがない場合

- 審査の結果、推薦に該当するチームがない場合、あるいは5チーム未満の場合は、出場チーム数を52チーム未満として実施する。

## 1. 応募用紙

- ・所属する都道府県協会の確認を得ていること。

## 2. 必須基準

- ・理想とする育成環境のチームを目指していただくために必須とする項目なので、全ての項目をクリアしていなければ二次審査の対象とはならない。

## 3. 評価基準

- ・各項目において点数化し、合計した得点をチームの評価基準得点とする。

## 4. 最終基準

- ・必須基準、評価基準の審査を経て、得点が上位のチームを最終的にチェックする。
- ・提出された動画により、マンツーマン実施状況や選手の出場状況等をチェックする。

## ■対象となるチーム

- ・ JBA推薦枠に応募できるチームは、男子は中学校(部活)、U15クラブ、Bユース U15、女子は中学校(部活)とU15クラブとする。

## ■推薦枠の考え方

- ・ 5つの枠の内、部活動、クラブ、Bユースでゼロにはしない。  
(最低1つは選出する方向、必須基準をクリアしたチームが対象の前提)
- ・ 残り枠を高い得点のチームに与える。
- ・ 2年連続で同一チームの選出は行わない。